# 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究　Ⅲ (1)

## ― 自閉症児の普通学級適応についての検討 ―

板垣健太郎・藤原　義博・財部　盛久・野口　幸裕
小山　望・太田　俊己・田村　元朗・古川千賀子
打越　実・飯島　郁郎・笠井　実・国谷　時司
鈴木　正彦・小林　重雄

### Ⅰ　目　的

本報は，等１報（板垣他，1979）および第２報（山根他，1980）において報告された小学校普通学校に通級している自閉症児のその後の経過を報告する第３報である。

第１報（１年次）・第２報（２年次）では，就学時のT－CLACの評価得点が高い群（A群），低い群（B群）に分けて考察がなされ，A群が全般に比較的に良好な適応状況（改善傾向を示すか変化なしの状態）を示し，B群が，1例を除いて，就学前より後退する部分が多く認められたこと，そして，この両群の差は次第に大きくなっていること，が報告された。

今回の調査時までに，B群として分類された３名の対象児のうち２名が特殊学級および養護学校に移行されており，残りの１名は，前報で報告されているように，良好な経過を示し，A群に類似したパタンになってきている。このため，本報では，前報までA群として分類されていた４名の対象児と経過の良好であったB群の１名の３年次１学期での状態を報告し，そこに示唆される適応上の問題を中心に検討する。

### Ⅱ　方　法

チェック・リストによる追跡調査および各対象児の学級担任との面接から得られた情報をもとに，各対象児の学校での状態を把握し，そこにみられる問題について考察を加える。

用いたチェック・リストは，T－CLAC，自閉症状，言語発達，学校適応，学習適応の５種類。調査および面接は昭和55年７月に実施した。

### Ⅲ　対象児

対象児は，小林の基準（1978）により自閉症と診断された児童で筑波大学知能障害研究室で指導を受け，昭和53年４月に小学校普通学級に入級したもの６名。ただし，このうち１名は３年次進級の時点で養護学校に移行されているものである。

以下に各対象児の簡単なプロフィールを示す（アルファベットで示した各氏名は，第２報と同一である）。

1.　A児，男児，昭和46年９月生

主訴：他児と遊べない。おちつきがない。指示に従えない。

出産：熟産，吸引分娩，生下時体重3760ｇ。

始歩：11カ月半。　始語：６カ月

大学での指導：

(1)昭和51年５月～昭和52年９月，個人指導（1/w）

(2)昭和52年６月～12月，ゲームを中心にした小集団指導（1/w）

(3)昭和52年10月～昭和53年２月，課題学習を中心にした小集団指導（1/w）

(4)昭和53年４月～　個人指導（1/w）

2.　B児，男子，昭和46年７月生

主訴：ことばの遅れ

出産：陣痛微弱。早期破水。吸引分娩。生下時体重3140ｇ（黄疸が強かった）。

始語：１歳

大学での指導：

(1)昭和50年10月～昭和52年９月 個人指導(1/w)

(2)，(3)A児と同様

(4)昭和54年４月～　個人指導（1/w）

3.　C児，男児，昭和47年２月生

主訴：他児と遊べない。
出産：熟産。正常分娩（10カ月で流産しそうになった）。
始歩：11カ月　　始語：1歳5カ月
大学での指導：
(1)昭和52年5月～　個人指導（1/w）
(2)昭和53年1月～12月　ゲームを中心にした小集団指導（1/w）
(3)昭和53年1月～2月　課題学習を中心にした小集団指導（1/w）

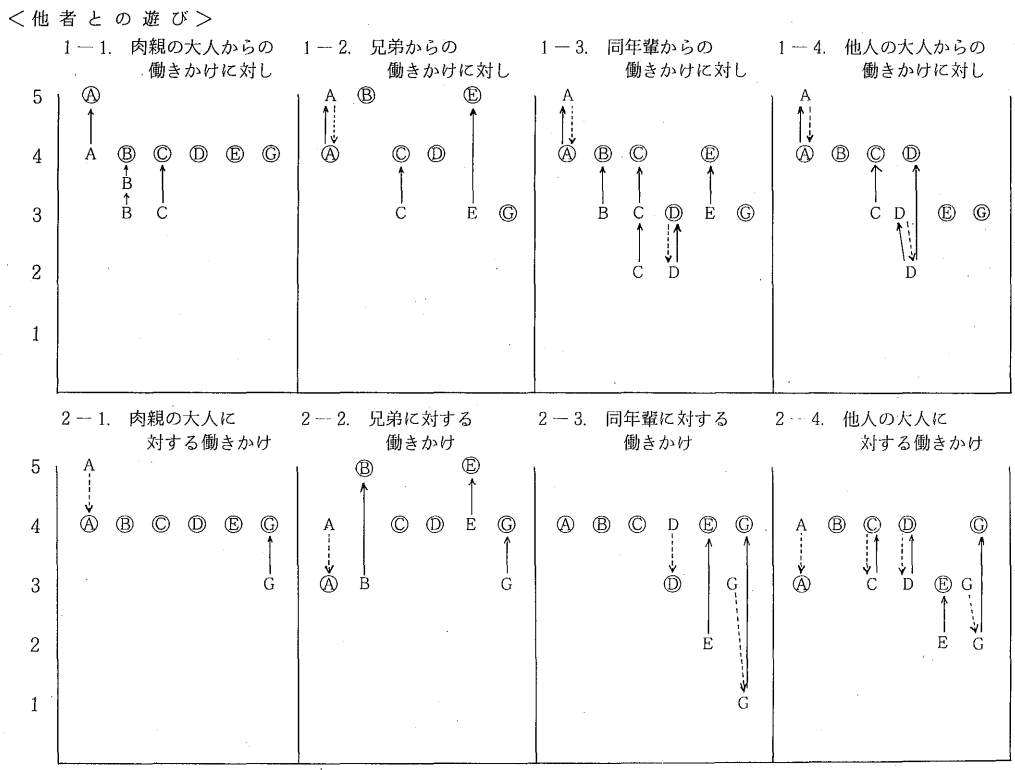
4.　D児，昭和45年11月生（1年就学猶予）
主訴：ことばの遅れ。落ち着きがない。
出産：熟産。正常分娩。生下時体重2800g。
始歩：11カ月。　始語：1歳
大学での指導：
(1)昭和50年11月～昭和52年2月　個人指導（1/w）
(2)　(3)A児と同様
(4)昭和53年4月～　個人指導（1/w）

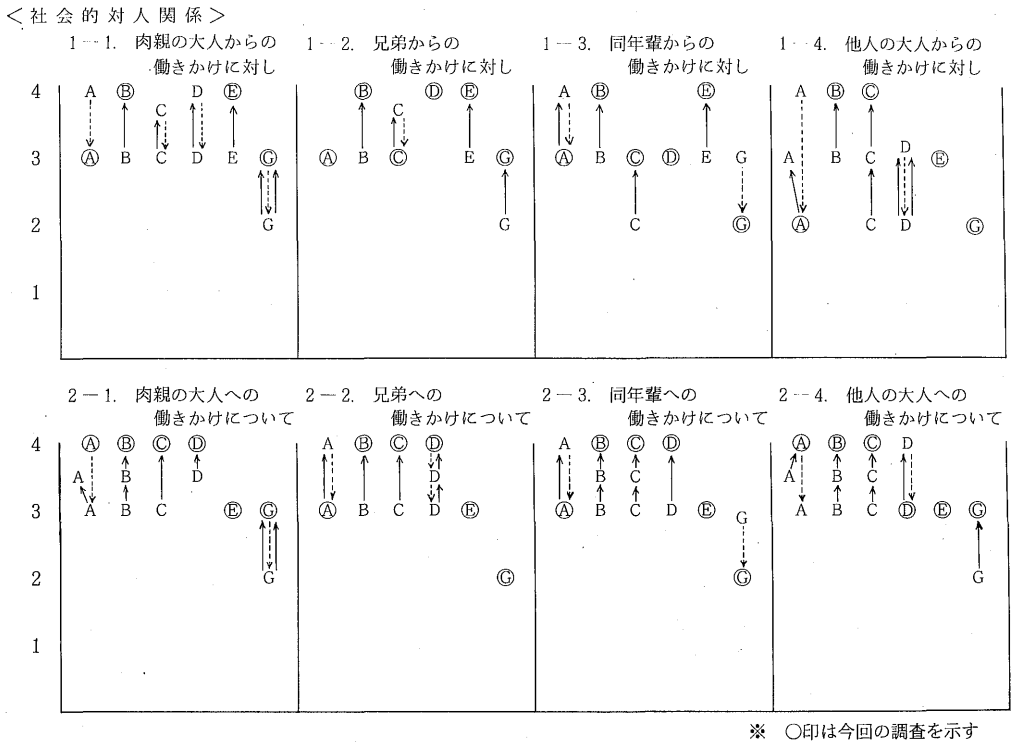
5.　E児，女児，昭和47年2月生
主訴：ことばの遅れ。ひとり遊びが多い。
出産：熟産。早期破水。生下時体重3200g。
始歩：10カ月　　始語　3歳6カ月
大学での指導：
(1)昭和51年5月～昭和52年9月　個人指導（1/w）
(2)　(3)A児と同様
(4)昭和53年4月～　個人指導（1/w）

6.　G児，男児，昭和46年1月生（1年就学猶予）
主訴：人に無関心。落ち着きがない。
出産：難産。生下時体重2900g。
始歩：1歳1カ月
大学での指導：
(1)昭和53年10月～　個人指導（1/w）中途若干の小集団指導
（昭和55年4月より精薄養護学校に転校）

## V　結　果

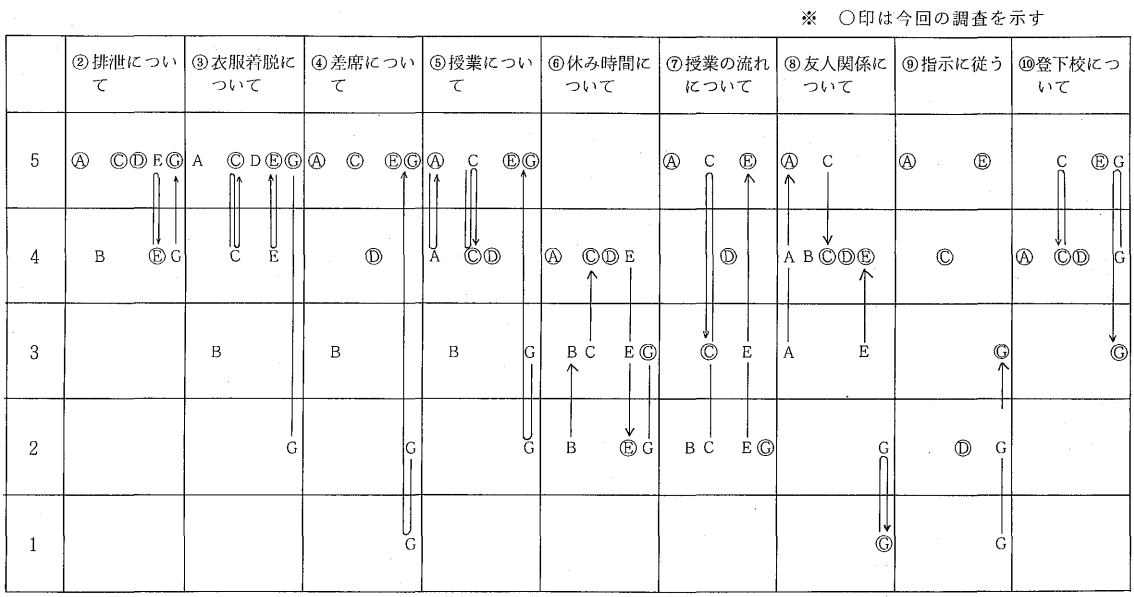
自閉症状および学校適応の各チェック・リストに現われた変化を，各々図1，図2に示す。






図－1 自閉症状の変化

※ ○印は今回の調査を示す




図－2 学校適応における変化

以下にこれらのチェック・リストの結果とT－CLAC（図3～8），および学級担任（例によっては家庭からの情報も含む）から得られた情報に基づき，各対象児毎にその現状を記述する。

1.　A児

自閉症状については，16項目のうち，13項目で低下を示している。ほとんど　上限から1段階の低下で，対人関係において「いっしょに～する」「協力して～する」「普通に反応できる」，といった段階から，「簡単なものはできる」，「大体できる」といった段階への下降である。学校適応については，ほぼ上限に達しているが，衣服着脱，授業，休み時間，友人関係の項目がわずかに上限に達していない。T－CLAC（図－3）では，全般にわずかな低下が認められるが，特に遊びについての評価が停滞している。学習適応では，数の理解については早くから上限（1年終了時期当）に達しているが，運動面では，水泳を除き，1年の半ばにも達していない。

担任は，全体的に目立った所がなくなったとしながらも，以下のような問題点を挙げている。

○行動面について

・授業中，離席等はみられないが，興味のない授業では勝手なことをしている。

・給食当番など係活動ができない。

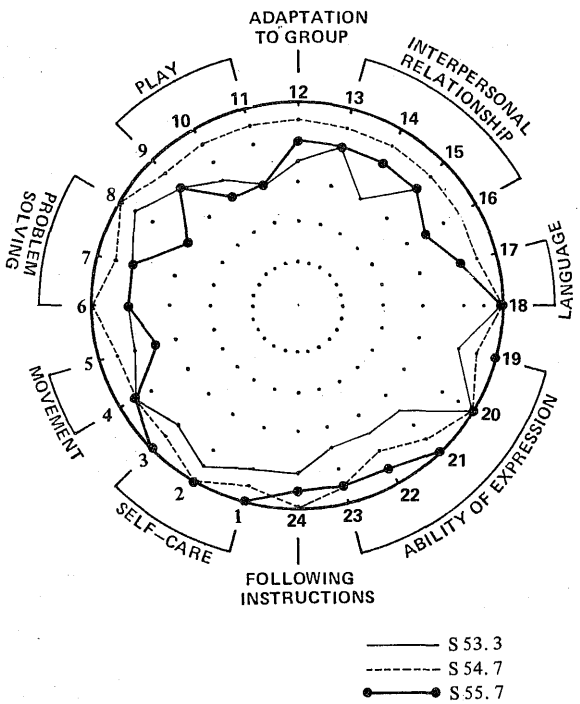



図　3

・会話ができない。

・いろいろ言い訳をし，ことばが多い。

・遊びのルールが理解できないことがあり，一緒に遊べない。

・鼻をかめず，箸の使い方も下手。

・集団での指示に従えないことがある。

○学習面については，4教科（国・算・社・理）のテストでは良い成績（90点以上）を残しているが次のような問題がみられる。

・国語 ── 読み方に抑揚がない，句読点を無視して読む。心情の読みとりができない。接続詞がわからない。作文が書けない。

・算数 ── 長い文章の応用問題ができない。

・社会 ── 社会事象の理解ができない。

・理科 ── 植物の生育や物理については理解できない。

・体育 ── 動きのリズムがなく，行進など手と脚の動きが同じになる。

・図工 ── カッター，ハサミなど使えるようになったが無器用，絵がかけない（色彩感覚がなく，色を塗り分けることができない）

・音楽 ── リズム感がなく楽器ができない。歌は歌うが音程がはずれる。

以上のように，対人関係のレベルが低下を示しながらも，目につく問題行動はほとんど認められず，学習面では，算数など，機械的な学習やパタン化されやすい学習，および知識によって解決できる課題については大きな伸びを示す一方，運動能力や器用さを要するもの，単なる知識やパタンでは解決できないものについては停滞を示し，その差は大きくなっているとみられる。対人関係や認知的側面に自閉的傾向を残しながら，問題行動は少なくなり，学習面では，それなりの伸びを示しながら偏よりも大きくなっている例と考えられる。

2.　B児

学校適応のチェックは実施されなかった。自閉症状については，他者との遊び方には変化がみられないが，社会的対人関係ではほとんどの項目で伸びを示し，ほぼ上限に達した。学習適応では，運動を除いてほぼ1年終了相当の段階に近い。ただ

し，特別表記の読み書き，日記，作文などは苦手としている。

T−CLAC（図−4）では，全般に伸びを示し，ほとんど上限に達しているが，課題解決と絵画製作の3項目で，低下を示した。

学習適応については，数の理解，自然，社会，聞く，話す，読む，書く，といった点は1年終了時の段階にほぼ達しているが，特別表記の読み書きが不充分だったり，全体的には低いレベルにある。絵画，音楽等とも伸びが悪く，特に運動は低い段階にある。

担任の観察によれば，いやなことを聞かれると自分の好きな話をするという傾向が残っている他は，特に問題行動もなく，おとなしく平和的で女の子に好かれている。学級活動等はそれなりによくやり，好きな係の活動などは自発的に参加する様子がみられる。休み時間は，同じようなレベルの子と遊んだり，自分から誘う場面もみられる。3年になって，学校でも大便がひとりでできるようになった。ひとのよい面があり，友達に「こないか」と誘われるとついていく，ジュースだといって尿を飲まされる，といったエピソードもある。

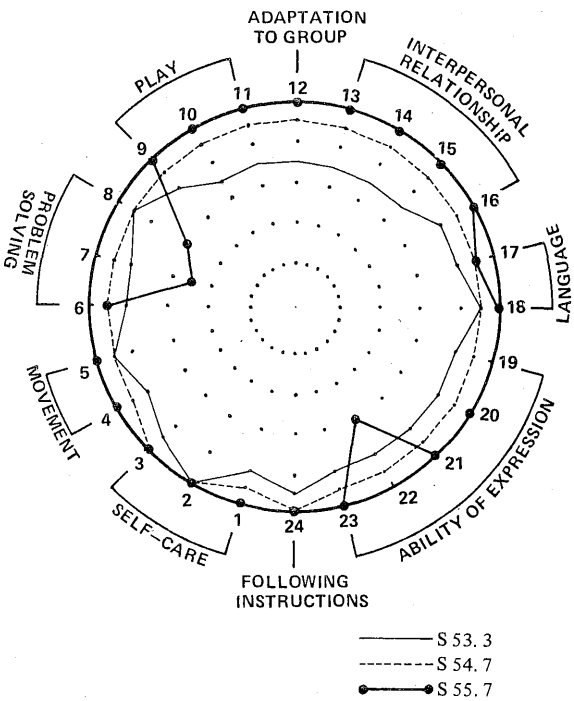



図　4

また，家庭では，弟（3歳）と一緒に遊んだり，注意するようになったとか，母親に対して文句を言うようになったとか，対人関係，感情表出の面での変化がみられる。手伝いもよくやり，目的に応じて自分でこづかいをためるといったこともでてきた，ということである。

以上のように，対人関係，感情，社会性などの面で伸びがみられ，目につく問題行動もなく，学級間ではそれなりに役割を果たしているとみられるが，教科学習の面では，特に運動面で遅れていることを含め，全体的に低いレベルに止まっている。

3.　C児

自閉症状のチェックではほとんど変動はみられず，遊びについては4段階，社会的対人関係については3〜4段階である。学校適応では，7〜9項目（授業の流れ，友人関係，指示，登下校）で1〜2段階低下を示している。T−CLAC（図−5）では，全般的な低下がみられ，特に，遊びの項目は停滞している。

教科学習については，音楽，運動の達成度が低い（1年終了時にも達しない）ことがめだつ。

学級担任によれば，全体的にめだった問題行動はみられない。学習面では，計算は得意でかけ算（九九）までできる。国語は，音読や簡単な文章を書くことはひと通りできるが読解力にはかける。理科，社会の分野では，花の色などを観察し，特徴を言う，分類ができ簡単なスケッチはできる，また，店，郵便局，警察，消防車，救急車のはたらきがわかる。

行動面では，朝礼時の整列，そうじ，係活動等の集団行動はとれるが，学年全体の指示などでは理解できないことがみられる。友人関係は，特に親しい子が1人居り，その子の言うことによく従い，帰宅後も遊んでいる。

以上のように，友人が限定され，学習に関する行動に伸びがみられない，大集団での指示が理解できない，といった傾向は認められるが，めだつ行動はなくなっている。教科学習は，音楽，運動の達成度が特に低く，全体的にも遅れを示している。

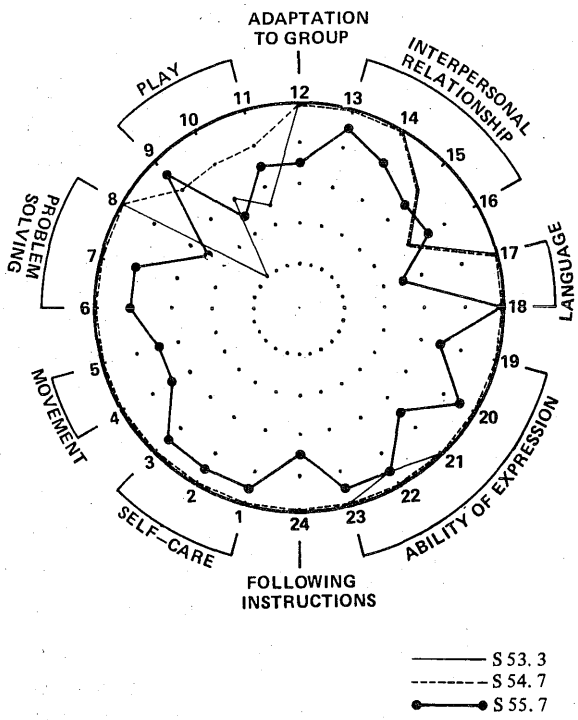



図　5

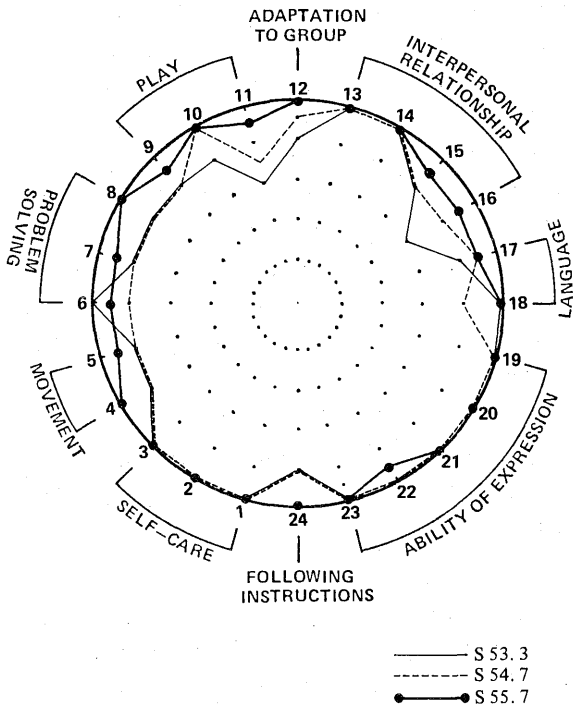



図　6

4.　D児

自閉症状では，「他人の大人からの働きかけ」の項目で２段階の上昇がみられた他，大きな変化がなく，３～４段階の評価が多い。学校適応に関しては今回初めて資料がえられたが，集団での指示に関する項目が低得点である他はほぼ４～５段階に達している。T－CLAC（図－６）では全体にわずかな伸びを示している。学習適応では，音楽，工作や運動面の達成度が低く，より上位の課題が達成されながらより下位の課題が達成されていないことがめだつ。

学級担任によれば，めだった問題行動はみられない。対人関係において一方的なコミュニケーションがみられ，自分のペースに合わせてもらえれば関わりがもてる。休み時間等，担任教師の所によく来る。職員室に度々出入りするという行動がみられる。

学習面では，教科別にみると，算数，自然など具体性を扱う教科は良いが，国語の文章の内容理解，作文など感情のくみとりや感情表現の必要なもの，社会など，見，聞きしたものを自由に表現することが必要なもの，体育などで，走る，投げる，跳ぶなどができても，ボール運動のように相互作用を必要とするなどの教科では追いついていけない場面がでている。

以上のように，本児の場合は，他児との積極的な関わりは停滞し，集団への参加も能動的とは言えないながらも，大人との関わりが増え，問題行動も少ない。学習面では，全体的に低いレベルに止まっている。

5.　E児

自閉症状に関しては，他者との遊びで全項目で上昇している他，全体的に改善がみられる。特に学校適応に関しては，「授業の流れ」「集団場面での指示」の２点でかなりの変化をみせている。T－CLAC（図－７）でも全般的な上昇を示し，ほぼ上限に達している。学習面では，それなりの伸

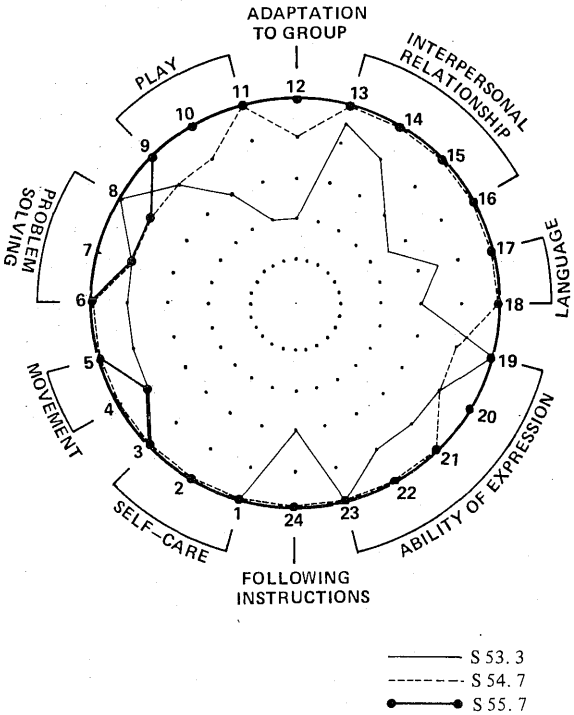



図　7

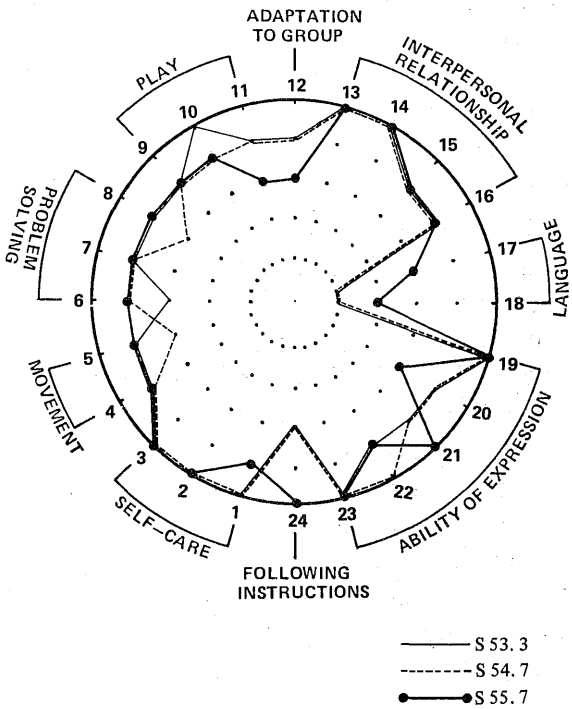



図　8

びは示しているものの，1年終了時相当に達していない教科が多く，特に音楽，運動での達成度は低い。

まとめると，全体的に順調な伸びを示しているとみられ，特に，兄弟との関わりや他者からの働きかけに対する対応の面での改善がめだつ。めだった問題行動は少ないが，休み時間に教室内外を徘徊することが多い，友達との積極的な関わりが乏しいことなどがみられる。なお，1年時は，本児に対しては介助員が付き添っていたが，2年時より付き添い無し，となっている。（担任との面接は行われなかった）

6.　G児

先に述べられている通り3年次から精薄養護学校に転校した。

現在同級の他の4名は重複障害があり，言語はなく反応も乏しい最重度級であり，カリキュラムを含め学校環境は全く変わったと言える。自閉症状チェックリスト（図―1）によると2年次で見られた負の変化の多くは1年次，あるいはそれ以上に正方向に変化しており，転校に伴う退行や低下は現在認められない。また学校適応チェックリスト（図―2）によると着席行動，衣服の着脱，簡単な役割行動は明らかに正方向に変化しており向上が認められる。学習適応に関しては，ほとんど伸びが認められない。

音声表出，要求表出については現在も乏しいが聴覚理解の点では，担任の簡単な言語指示に反応することが見られ，また以前の普通学級では1度も食べなかった給食を指導の結果食べられるようになったこと，および現在の問題としては同級の他児とレベルが合わず本児への関わりが少ないことが担任より述べられている。

## V　考　察

はじめに全体的に共通してみられる傾向を，行動上の問題と教科学習の達成度の2面から検討したい。

1）行動上の問題

ⓐ自閉症状チェック・リストに基づいて

上昇，停滞あるいは下降，いずれの経過によるかは別にして，評価点が上限から1段階下の段階に集中してきていることが注目される。特に「他者との遊び」において第4段階の評価が多くを占めている。これは，「簡単なルールに従って遊べる」，「得意な遊びには参加する」という段階である。これに対し第5段階は「一緒に」「協力」して遊べることが必要で，年齢相応に普通に関わることができる段階であり，ここまで到達することの困難さ，あるいは（下降している例もみられることから）この段階を維持することの困難さがうかがわれる。小学校3年生という年齢を考えれば，クラスの他児間での遊びのルールは高度化し，その関わりも複雑化していることが予想され（症児が個体としては後退を示さず，それなりの発達をしていても），症児と他児との相対的な差が大きくなり，症児が年齢相応の関わりをもてなくなっている状態ととらえることが妥当と考えられるが，今後の推移を見ていくことが必要であろう。

ⓑ学校適応チェック・リストに基づいて

10項目のうち，1～4項目での負の変化はほとんどなく，ほぼ上限に達した。これらの項目は，身辺の事柄や着席などの基本的な習慣や態度に関するもので，この点では問題が無くなっているとみられる。一方，5～10項目では負の方向への変化が何例かでみられた。授業中の態度，休み時間，集団場面での指示，友人関係などの項目である。いずれも大きな下降ではないが，教科学習に対する興味のあり方，その内容の理解度，他児との発達の差の開き，といった問題が反映されているものと考えられる。

ⓒT－CLACに基づいて

全面的な下降を示した例もあり，多くの例で部分的な下降がみられ，順調に伸びを示すという形にはならなかった。T－CLACは上限に5歳児相当の発達を想定しているのに対し，対象児がすでに小学3年生に達していることや，記入者が変わったり，同一記入者であってもその見方が変動していることが想定されたりし，評価そのものの信頼度にも問題が残ると思われるが，CLACの尺度が上限ではその評価基準がなんらかの形であいまいさや相対的な意味合い（他児との比較や年齢相当の発達との比較）を含む項目があることにも原因していると推測される。

全体的にみて比較的多くの例で共通して下降や落ち込みを示している項目について検討してみる。共通してみられる下降，停滞（低い段階での）の項目としては「遊び」と「課題解決」が挙げられる。DおよびG児を除き，両項目のうちの両者あるいはいずれかに下降を示している。「遊び」は対人関係を含み，周囲の子との相対的な差の開きが問題となっていることがうかがわれる。また「課題解決」では，課題に対して年齢相応の取り組みを示すに至っていないことが多いことの現われであろうと考えられ，ここでも，退行というよりも相対的な差の開きが問題になっているように思われる。ちなみに，絶対的な発達を見る項目「身辺自立，TVについて，絵画製作など）では，下降はほとんどみられないか，みられてもわずかなものにとどまっている。

以上まとめると，基本的な生活習慣やくり返し行われる活動についてはほとんど問題がみられず，学習の活動の大きな流れには沿って活動している様子がうかがわれるが，

①他児との発達の差が相対的に大きくなってきていること。

②状況（特に教科学習の内容や大集団での指示）に対する理解が困難な面があること。

といった問題が存在していると考えられる。

しかし，すべての例において，担任は「特に目につく問題はみられなくなった」としており，人に教えられるまで対象児が障害児であることに気が付かなかったというエピソードもあったほどである。これらを総合して考えると，以上のような問題を含みながら，学級内でそれなりに過ごす技術を身につけ，目につく問題行動は露呈せずに過ごしている，という状態が想定される。また，教師や他児にとっても，各症児の行動について，予測しがたいことはなくなり，対応関係のもちにくい点はそれなりに受け止め，理解のおよぶ範囲で援助を行っている，という状態が想定される。いわば，互いに慣れを示している状態と考えられる。

2) 教科学習の達成度に関して

今回使用した学習適応チェック・リストは，上

限が1年終了時相当となっており，これを通過した分については評価がなされていないこと，3年次のカリキュラムでは取りあげない活動項目があること，評価者が変動していること，などの問題があり，一律に比較（個人内での比較，他児との比較）することは妥当性を欠くと判断されるが，全体を通して共通してみられた傾向は

①計算などのごく一部を除き，全体に達成度が低い。

②より下位の項目が達成されていないことがある。

③運動・音楽が共通して低い段階に停滞している。

の3点である。

①については，算数，社会ではほぼ全員が上限に達しているが，他は，話す（C児），読む（B児），聞く（B児）水泳（A児），で上限に達しているだけで，ほとんどが1年終了時以下のレベルにあたる。算数では，計算など機械的でパタン化されやすい学習であり社会も1年終了時までのチェック項目では，機械的に覚えやすい内容になっている点で達成度が高まったものと考えられ，その他では，抽象性や複雑さの度合いが強まり，機械的な学習では達成できない内容が多くなっていることと関連して達成度が低まっていると考えられる。また，こうした全体的な教科学習に関する理解の低さが，行動上の問題として，学校適応チェック・リストの後半の項目（特に，授業に関する項目）での停滞や低下に関係してきているものと考えられる。

②については，共通して抜けている項目を見出すことは困難で，それぞれの対象児で，「抜け」の現象が認められる，ということに留まるが，自閉症児が，いわゆる知恵遅れのように，全般的な知能遅滞としての遅れではなく，偏よった発達を示することの現われとしてとらえられよう。これら，通過できにくい項目についての内容の検討は今後の課題となるものであろう。

③については，ほとんどの対象児で，運動面，音楽面での伸びが低い段階で停滞しており，伸びが著しく悪いことが示されているわけであるが，このことは，知的発達面と並行して運動面（粗大および微細な）での発達の困難さをうかがわせる。A児でも，運動は全体に低く1年次の半相当の評価が多いが，例外として水泳だけは上限に達している。スイミングクラブで訓練を受けていることが反映されていると考えられるが，このことは，個別的に一定の指導を受けた場合，相当のスキルの向上が得られることが可能なことを示唆すると同時に，そのスキルの獲得が他の運動課題に影響することが認められない傾向も示唆するものと考えられ，運動面でも，自閉症独得の発達の困難さがうかがわれる。

以上のように，教科学習に関しては，機械的な学習の良好さ，全般的な達成度の低さ，アンバランスな達成度といった傾向がみられ，自閉症の知的，認知的あるいは運動的な発達の特異な側面を示してきているものと考えられる。

次に，以上のような全体的な考察をふまえ，各症例にみられる特徴（特に対人関係のあり方）について検討したい。

A児では対人関係が2年次に比べて受動的な様相を呈している。B児では，感情の発達や社会性の発達が低いレベルではあるが顕著な形でみられた。また，C児では限定された友達との関係（受身的であるが）が強まり，D児では大人に限って対人関係が改善されている。以上の4名は，入学時のT−CLACが高得点であったグループ“A群”（板垣他，1979，山根他，1980）であり，2年次までは比較的順調に伸びを示し続けていたが，B児を除き，3年次になって停滞あるいは低下を示している。このことについては上の考察で述べたように，他児との相対的な発達の差が大きくなったものと考えるのが妥当と思われるが，その現われ方として，対人関係全般が停滞する例（A児），対人関係が限定されてみられる例（C，D児）があると考えられよう。また，B児では，遊び方では変化はみられないものの，社会的な対人関係では全面的な伸びを示しているが，この例の場合，感情表出や社会性が低いレベルながら顕著であったことが注目される。

一方，入学時のT−CLACが低得点であったグループ“B群”（板垣他，1979，山根他，1980）に属していたE児は，対人関係も含め全般的に改善傾向を示し続けている。E児は，入学後の経過が良好で，1年1学期の段階で既にA群と同様のT−

CLACのパタンを示すに至っている。これまで，E児の発達，変容が顕著に続いている状態と考えられるが，A群が上記のような経過をたどっていることを考えれば，遅れてA群と類似した経過をたどることも予想される。今後の経過を見ていく必要があろう。

なお，他のB群（F児，G児）が普通学級から離れざるを得なかったのに対し，E児が良い経過を示している要因については，B群の中でも高いレベルにあったこと，介助員が補助にあたっていたことがあることなどが関係していると考えられるが，2年次の段階で教科学習の達成がA群と同程度になされており，3年になって学習場面での行動がかなり改善されていることを考えれば，知的な面での理解力が大きな要因となっているように思われる。

最後に，以上の考察をまとめる。

①基本的な生活習慣やくり返し行われる活動についてはほとんど問題がみられない。

②他児との発達の差が相対的に大きくなり，みかけ上進歩の停滞や後退がみられる症例が多い。

③教科学習の達成度は全般に低いが，機械的な学習や単なる知識の習得は良好であり，アンバランスな発達がみられ，自閉症特有の知的障害がうかがえる。

④これに伴って，授業など学習場面での積極的な参加が充分といえない部分が残っている。

⑤しかし，学校生活としては，少なくとも他児や教師を困らせる行動はほとんど無くなり，それなりの生活の技術を身につけてきていると考えられる。

（付記：本研究の資料集収，まとめにあたって，人間学類生，本田協子，竹内菜摘，森下由美各氏の協力を得ました。）

**参考文献**

1. 板垣健太郎，他．自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究　I　（2）
——自閉症児の普通学級適応についての検討——
心身障害学研究 3　101－109　1979.
2. 山根律子，他．自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究　II　（1）
——自閉症児の普通学級適応についての検討——
心身障害学研究 4－1，82－91　1980.

# The follow-up studies concerning school adjustment of handicapped children with autistic symptoms III (1)

## – Discussion with adjustment of autistic children in regular class –

Kentaro Itagaki, Yoshihiro Fujiwara, Morihisa Takarabe, Yukihiro Noguchi, Nozomi Oyama, Toshiki Ohta, Motoaki Tamura, Chikako Furukawa, Minoru Uchikoshi, Ikuro Iijima, Minoru Kasai, Tokishi Kuniya, Masahiko Suzuki, Shigeo Kobayashi

Following the 1st and 2nd reports (Itagaki et al., 1979, Yamane et al., 1980), we report in this study how six autistic children in regular class (one of these children was removed to special school for the mentally handicapped at April 1980) have adjusted from July 1979 to July 1980 (from the second and third terms in the second-year class to the first term in the third-year class). The data were accumulated by the check lists (autistic symtoms check list, adjustment check list, T-CLAC and achivement of academic learning check list) and interviews to the class teachers.

In the scale of autistic symptoms check list, evaluations tended to be concentrated on the 4 grade. They showed difficulties in reaching to or keeping the highest grade (grade 5). In the scale of adjustment check list, they have almost reached the highest grade in a fundamental habits or attitude. But in some cases, negative changes were showed on the items of an attitude to the lessons, an intermission, following instruction to the group and interfriend-relationalships. T-CLAC showed little improvement in many cases and negative changes in some cases. Commonly they showed stagnation on items of "play" and "problem solving". Achievement of academic learning check list showed the tendency that: They generally achieved lower level, without in a patterned learning like a calculation. Lower items have not been cleared at times. They commonly didn't remarkably advance in physical training and music. Remarkable problem behaviors were not reported in the interviews to the class teachers.

According to the results above, we concluded as following,

(1) They well performed ordinary works or repeating actions, and no problem in the self-care.
(2) It is supposed that their development was relatively slower than other classmates, and they showed stagnation, negative changes or little improvement on the surface.
(3) Progress of academic learning showed peculiar unbalance.
(4) They didn't participate thoroughly in the school lessons, perhaps because of their lower achievement of the academic learning.
(5) However, they have acquired skills to adapt to their classroom and passed the hours without showing marked problems.